

歴代理事長が語る思い出

理工学部の前身は民活

第 23 代理事長

佐藤 富三 (22M 機械)

平成 18 ~ 20 (2006 ~ 2008) 年



私は、平成 18 ~ 20 年の間、工業会理事長を務めた。就任当時の工学部は、平成元年の改組以来 20 年近くの歳月を経て、学科再編による新学科の設置を計画中であった。

この時点で工学部は、創立 90 数年が経過し、工業会 (以下「本会」) も設立後 80 数年の歴史を刻んできている。本稿では、大学の創立時前後の歴史について地元出身者でもある者として、思いつくままに書いてみたい。本会の歩みについては、別掲の沿革を参照いただきたい。

旧制の桐生高等工業学校校歌に、「・・・名邑、桐生の栄のもと」とあるように、創立当時の桐生は、関東はおろか、全国的にも知られた織物のメッカであった。この「名邑」のまちの人たちの民活によって、理工学部の素地ができたのである。

桐生は、織物の産地として、江戸時代初期の頃からすでに注目されていた。その証拠に桐生の町並みがある。当時の代官は、本町 1 丁目から 6 丁目までの区画整理を指示している (慶長 10 年)。下って明治維新には新政府となって、欧米列強と伍していくために、富国強兵と殖産振興を唱え、国を挙げて産業の振興を始めるようになった。特に、桐生では輸出が急成長したときでもある。因みに桐生織物史によると、管内の出荷高は明治 29 年に、2 千 9 百万円余とある。当時の国家予算の約 2 割に相当するほどで、いかに隆盛であったか窺い知ることができる。

当時の桐生のまちにあっては、有志は郷土愛に支えられて意気軒昂であった。これに呼応するように、高度の染織技術を渴望して実現したのが「桐生染織講習所」である (明治 9 年)。

その後、技術の質的向上と平仄を合わせるようにして、「桐生織物学校」(明治 29 年) に引き継がれていく。指導教師陣も相応して充実し、高レベルの教

育が行われていた。その後、「群馬県立織物学校」に昇格し (明治 38 年)、名実ともに高い染織技術の傳承が進み、桐生の興隆の基盤となったのである。

さらに、地域からも、高度の技術者教育機関設置要望の声が興り、国立の高等専門学校設置の声が一気に盛り上がっていった。

地元の武藤金吉代議士 (当時) は、この要請をいち早く察知し、直ちに行動を始め、明治 43 年には「高等染織専門学校に関する建議書」として纏め、第 26 帝国議会に提出した。

当時の群馬県知事は、織物に造詣が深く、強い関心を寄せているとの情報を得て、山田郡長、桐生町長を動かした。中心的に活躍した地元の有志が、森宗作をはじめ書上文左衛門、大沢福太郎、飯塚春太郎代議士などの各氏で、名実ともに当時最高の陣容であった。ここで一気に山が動き出したのは至極当然のことである。

その結果、当局から、用地の 1 万 5 千坪 (約 49,650 m²) と設立費 35 万円を地元負担とする条件が示された。桐生町としても、これを受容するにはかなりの時間がかかったという。当時の 35 万円は現代感覚からすると 35 億円ほどにもなるのか。

土地については、前原氏 (宮司筋) が所有する赤城の森 (天満宮の神域) の一部を提供する申し出があり、資金の工面に近隣産地の有志や、東京・関西の集産地の得意先にも嘆願したという。それでも提示額には至らず 15 万円に留まり、県に窮状を申し出たところ、その努力が認められ、不足分の 20 万円は県費から拠出することで資金問題は一件落ち着いた。

この結果、明治 45 年の第 28 帝国議会に、「第 8 高等工業学校新設の建議案」を提出し、可決され、大正 4 年 12 月 27 日の勅令をもって、「桐生高等染織学校の設置」が公布された。

学校は、桐生高等工業学校、桐生工業専門学校を経て、新制の群馬大学工学部となり、今日の理工学部に至ったのである。改めて関係諸氏に感謝の誠を捧げたい。

以上が大学設置の経緯であるが、国立学校の民活支援による新設がいかに難事業であったか、先輩諸氏の東奔西走と、郷土愛に満ちた理想には驚くほかない。特筆大書しても過ぎることはないと思う今日この頃である。

感謝と愛着を込めて

工業会 100 周年を祝い益々の発展を祈ります。

第 24 代理事長

戸叶 常雄 (29C 応化)

平成20～24 (2008～2012) 年



はじめに

私は今年の6月で満91才、工業会員となって73年になります。昭和25年桐生工専電気科を、更に同29年工学部応用化学科を卒業し、6年間桐生で青春を謳歌しました。特に応用化学科では根岸教授(第6代工学部長)に師事し、先生が40才を越された気迫に満ちた頃に、繊維化学研究の進め方の基本をたたき込まれたことは望外の幸せでした。

卒業後は、合繊メーカーの倉敷レーヨン(現クラレ)に入社し、関西を中心に43年勤務しました。繊維業界には同窓生が多く、色々な接点があり、四国支部・大阪繊維支部・京滋支部などで大変お世話になりました。

定年後は、故郷(佐野市)に戻り、縁あって工業会のお世話役をさせていただきました。沢山の同窓生や諸先生の方々と親しく交流し、母校愛、同窓愛の大切さを実感した一人です。

同期生の絆の大切さ

手元に一冊の本があります。桐福会とは昭和29年(フク=福)に応用化学科と色染化学科を卒業したクラス会(63名)で、新制大学の2期生です。平澤・蔵本という名常任幹事のもと、85才まで親交を深めてきました(現存者は40%)。卒後50周年(平成16年)に学生時代の思い出をまとめようということになり、26名が執筆し、平澤氏がまとめて平成20年に出版され好評を博したものです。工業会報の糸ぐるまに毎回紹介されているように、クラス会・クラブ会・研究室会などは、最も大事な絆であり、夫々



のキーマンとのネットワークは工業会発展のベースとなりうると思いますので大切にしてください。

工業会のお世話役 14 年

平成10～20年は、総務担当の副理事長として高橋・五十嵐・佐藤の各理事長に仕え、同20～24年には理事長を務めました。

この間、大学は平成14～16年、群馬・埼玉の両大学統合問題で揺れ動いた後、同16年に国立大学が法人化されました。平成17年には工学部創立90周年記念事業同19年には大学院大学化への改組・再編と太田キャンパスの新設などがありました。

大学との運命共同体である工業会も変わりました。以下に役員として在職中の活動を列記してみます。平成13年(2001年)には新世紀を迎えて、工業会活動理念の制定と年維持会費制度を導入。大学創立90周年では、傑出した先輩11人の顕彰と染料コレクションの整備に全力投球。学生に対しては、卒業時に工業会奨励賞授与制度の導入、先輩は語る講演会、工場見学会等の実施。支部・連合支部活性化の諸対策(関東地区支部長会の開催)と大連理工大での中国支部の設立(平成20年)。太田キャンパスへの支援。平成23年(工業会設立90周年)には念願の一般社団法人格を取得しました。

これらの活動は、偏に優秀なスタッフと会員皆様のご支援あってのもの感謝の気持ち一杯です。また、平成21年4月に板橋先生が46才で工学部長になられ、そのお人柄と迫力で工業会が盛り上がったことも忘れられない思い出です。その後はや8年、工業会は益々充実発展して100周年を迎えられますこと、感謝と愛着を込めて、心から祝意を表します。

あとがき(心残りのこと)

大先輩の中里博明氏(昭和15年紡織科卒後、東工大卒。品質管理の大家)から、平成23年10月14日に、工学部に資産を寄付したいとの手紙が届き、11月10日に板橋工学部長、土屋事務長(いずれも当時)と戸叶が、新浦安の老人施設に入居中の中里ご夫妻を訪ねました。温厚で母校(桐生)を愛する人でした。その後お二方ともお亡くなりになって、平成26年頃に2億9千万円が寄贈されたと聞いていますが、ご遺族の意向とはいえ顕彰も公表もされていないのは何とも納得しかねることです。

理事長在任中の思い出

第 25 代理事長

金子 祐正 (30C 応化)

平成24～29 (2012～2017) 年



群馬大学工業会（以下「本会」）が創立 100 周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

私の理事長の任期は、平成 24 年 6 月から 29 年 5 月までの 5 年間でしたが、この間思い出深い事業について述べてみたいと思います。

第 1 に「会員の表彰制度」を制定したこと（平成 25 年）。会の運営や社会活動で功績のあった会員を広く認知して感謝の意を表すとともに、会員のモチベーションの向上や活性化に繋がることを期待した。被表彰件数は、毎年会員等が推薦し、選考委員会の議を経て、令和元年度までに「工業会賞」21 件と「社会貢献賞」22 件。表彰された方から喜びの声を聞くことがあり心温まる思いがあった。

第 2 に「年会費制度」の設定であった（平成 27 年）。少子化による入学定員の減少により、工業会費の収入減が予想されるなかで、長期的な財政基盤の確保を目指した。同会費は、60 歳以上のすべての会員に毎年千円の納入を協力願い、令和元年までの 5 年間で納入者数は延べ 2,139 人、総額 854 万円であった。会員の継続的な会費納入を定着するためには、本会是对価としての会員サービスの環境整備が一層必要ではないかと思われる。

第 3 に「就職支援室」を設置したこと（平成 26 年）。就活生が希望する企業への OB・OG 訪問の紹介、斡旋であった。令和元年度までの 6 年間で対応した学生数延べ 184 人に対して企業などを紹介した件数は 339 件。OB・OG 訪問は、就活のヒントが得られるだけでなく、企業等の考え方や雰囲気などが判る効果がある。また就活生対象の企業合同説明会も好評であった。後に就職が決まった学生が支援室にお礼の挨拶に訪れたときは感無量であった。

さらに、「OB 技術支援室」を設置（平成 26 年）して、OB が係わる企業情報やニーズを調査の上で、大学との共同研究などを紹介する事業として会員への便宜、支援を図った。また全国 57 の支部長が

集まる「全国支部長会議」を隔年開催（平成 24 年～）、さらに「中国支部総会」にも参加（平成 26 年）して、内外で情報交換するなど、本会の活性化を図った。

第 4 に「理工学部創立 100 周年記念事業」の募金活動であった（平成 25～27 年）。事業は大学が募金の窓口になり目標額は 5 億円。このうち本会は目標額 1 億円を目指した。募金活動は、平成 25 年から支部会員が中心となり、卒業生が勤務する企業にも出向いて積極的に勧誘した。その結果、募金総額は 1 億 4 千 2 百万円（個人 3,157 人で 8 千 5 百万円、法人 112 団体で 5 千 7 百万円）。本会としての目標額はほぼ達成できたが、全体の目標額には遠く及ばなかった。景気の低下傾向や広報活動に十分な人員が配置できなかったことなどが要因と思われる。また、本会が協力した「工学部の百年」の発刊や「100 年の写真展」の開催は思い出の一端となった。

そのほか、全学的な活動として、「群馬大学同窓会連合会」が設立されたことである（平成 31 年）。近年大学を取りまく環境が厳しくなり、同窓会が一体となって大学を支援する必要性に迫られていた。各学部の同窓会は、平成 24 年以来協議を重ねて 7 年後にようやく同窓会連合会が設立された。会長には不肖私が選任されて身も引き締まる思いであった。連合会の目的は、各学部の同窓会の相互交流により連帯感を強固にするとともに、大学とのコミュニケーションを図り大学支援の体制を構築することである。

今後の本会への要望は、若い人に同窓会の意義や効果を積極的に広報し、若い活力を導入することである。例えば、平成の卒業生による「平成の会」や「女性の会」、在学生による「学生の会」や「留学生の会」を結成して事業に参加し易いような組織作りを期待したい。

終わりに、工業会設立当初からの多くの諸先輩のご活躍に深く敬意を表するとともに、大学と本会は、次の 100 年に向けて社会の期待に応じて益々発展することを祈念します。